

■第 120 回 み言葉の分かち合い

●第 1 朗読 イザヤ書 42・1～4、6～7

この箇所は「主の僕の歌」と呼ばれ、バビロン捕囚という闇の中にあるイスラエルの民を、神は決して見捨てず、その救いの手は異邦人にも差し伸べられる、との希望が語られています。神の正義は「力」ではなく、静かで忠実な「僕」を通して世にもたらされ、この僕こそ「イエス」であり、彼によって救いが成就します。(マタイ 12・18～21) 神はこの僕を選び、支えては喜び、霊を注ぎます。神によって僕の使命は果たされ、全世界の国々に正義がもたらされます。僕は自己主張をせず、群衆を扇動することなく静かで謙虚に歩まれ、罪人や病人、社会から排除された人々を「傷ついた葦」「くすぶる灯心」と言われ、彼らは決して見捨てられることなく、忍耐強く寄り添われます。僕も苦難に遭遇しますが使命を手放すことなく、遠い異邦の地である「島々」までも、彼の教えを待ち望みます。これらは、イエスが十字架に至る道への預言でもあります。僕が「契約そのもの」となり、イスラエルの民と神との契約を完成させると同時に「諸国の光」となります。霊的な盲目は開かれ、罪・恐れ・絶望の束縛からの解放により、癒しと赦しが実現します。「力によらず、愛と真実によって世界を救うメシア」は、弱者や小さな者の希望の灯を消すことなく、神の正義と光を広げる「主の僕」の道を歩まれ、私たちもこの道へと招いておられます。

【著者の一言】聖書は今も生きている預言書のように感じました。

●第 2 朗読 使徒言行録 10・34～38

この箇所は、神がコルネリウスに、神を畏れる信仰者のペトロを、幻を通して「ペトロを招け」(使徒 10・5-6)と命じて、ペトロがコルネリウス(ローマ軍の百人隊長・異邦人)の家で語った説教です。ユダヤ人か異邦人なのか、律法を守るのか否かで、神の救いは制約されず、コルネリウスの信仰との出会いにより「神は人を分け隔てされない」と、ペテロは悟ります。神を尊び、従おうとする思い、神を基準にして生きる姿勢が「神を畏れ」で、神の前で誠実に生きようとする人が「正しいことを行う」で、神に受け入れられます。ユダヤ人と異邦人も含めた全人類の主を、「すべての人の主」だと宣言しています。イエスが語った福音の中でも、神との和解、罪の赦し、恐れからの解放、神の国の到来、神との平和(シャローム)を告げる言葉が「平和を告げ知らせた御言葉」です。イエスの福音、癒し、奇跡、説教などが「全土で起きた出来事」で、歴史的な事実です。イエスに油を注いだのは、神の三位一体の働きにより成就します。具体的には、イエスが洗礼者ヨハネからヨルダン川で受洗された際、聖霊が彼の上に降って、御子イエスがメシア(油注がれた者)として公に示されました。イエスに、三位一体の「神が共におられた」ので、人々を助け、悪魔の支配から解放され、数々の奇跡を行います。

【著者の一言】「イエスと結ばれ、イエスに倣おうとして歩む者を、神は受け入れてくださる」これこそが福音の核心です。「聖人になれ」「もっと正しく、清くあれ」と、人の完成度を高めようとする思いの一方で、不完全な者も神は受け入れてくださる、との思いは人をホッとさせ、安心感が生まれ、主との緊張は解かれ、肩の力は抜け「このまま歩んでもよいのだ」との確信を大切にしたいものです。

●福音書朗読 マタイ 3・13～17

洗礼者ヨハネは、罪の悔い改めを宣べ伝え「メシア到来の準備者」として「罪の悔い改め」の徴として洗礼を授け、(イザヤ 40・3)ここに罪のないイエスが登場します。イエスの受洗は預言の成就であり、人と同じ立場に立って(イザヤ 53 章)生きる姿を表します。ヨハネは、イエスを偉大な方と知っていましたが、(マタイ 3・11)預言が成就する全体像はまだ把握しておらず、イエスの受洗を止めさせようとします。イエスと洗礼者ヨハネを「我々」と言い、イエスは「神の救いの計画(エフェソ 3・3)を引き受けられた方」で、ヨハネは「神より遣わされた預言者」で、この二人が、それぞれの役割を果たすことが「ふさわしい」旧約において、王に預言者が油を注ぐ場面が記されており、新約では「天(神)がイエス(子)に向かって……神の『霊』が……降ってくる。」との場面が、三位一体の神により、イエスに『油を注がれる場面』であり、イエスがメシア(救い主)であると公に示され、イエスの公生涯への出発点です。「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」(詩編 2・7、イザヤ 42・1)と神が語り、イエスこそ「神の心に適った者、救い主である」と、証言されました。

著者 蒲池 明憲